

発行所(郵便番号100)  
 東京都千代田区丸の内2-4-1  
 丸の内ビルディング617号室  
 社団法人スウェーデン社会研究所  
 Tel (3212) 4007・1480  
 Fax (3212) 1447  
 編集責任者 岡 沢 憲 美  
 印刷所 関東図書株式会社  
 定価300円(年間購読料四千円)  
 1993年12月25日発行  
 No.281 第26巻12号  
 (毎月1回25日発行)  
 昭和44年12月23日第3種郵便物認可

# スウェーデン社会研究月報

No.281 Bulletin Vol. 25 No.12

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning  
 (The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)  
 Marunouchi - Bldg., No.617 Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

## 不況の中の旅行ブーム

Travel - fever in a Depression

三 瓶 恵 子

Ms. Keiko Kjellsson - Sampei

スウェーデンでは依然として深刻な不況が続いている。失業率はすでに10%近くに上っている。けれども生活実感としては、それでもどん底は脱したのではないかと、とも思われる。たとえばダーゲンス・ニーヘテル紙の「生活密着景気指標」では、南行きのトラック輸送量の増加(輸出の伸びを暗示)や牛フィレ肉の売り上げ量が増えている(スウェーデン人は牛肉が大好きなのだが、高いのでお金がないときには食べない)ことが示されている。また、同紙やスベンスカ・ダグブラーデット紙の求人案内広告も一時はほとんど消えていたのに、最近では少しページが増えてきた(それでも失業率が低くならないのはどうしてなんだろう?)。不動産の広告なども、92年11月の金融ショックの後には軒並み叩き売りのような値段で出されていたものが、最近では売り惜しみをしているのか、物件の数が減って、「買いたし」という広告のほうが目につくようになってきている。

その中でももしかしたら景気回復を示す一番の徴候かもしれないという出来事がある。チャーター旅行フィーバーだ。今年の秋一番の不況知らずは海外旅行を取り扱う旅行者。長野オリンピック宣伝のための、日本の旅行者組合によるスウェーデンの旅行者招待ツアーも取り止めになった。この空前の旅行ブームのさなか、マンパワーを確保しなければならないからだ。

今回の旅行はブームの背景には、93年の夏が雨ばかりで気温が上がらないひどい夏だったということがある。93年は5月に30度に上る日が2、3日続いた後、6月に入るともう秋のような寒さになってしまった。夏に十分に太陽を浴びることができなかったスウェーデン人は、9月にはすでに

クリスマス・お正月の旅行を予約したり、あるいはそれまで待ち切れずにクリスマスのためにとっておいた年休の残りでもまだ値段が高い秋のうちに南の方にいくようになっている。

夏から秋にはギリシャやマジョルカ島(スペイン)、イスラエル、トルコなど地中海周辺が人気だが、晩秋から冬にかけてはもっと暖かい、カナリヤ諸島(西アフリカの沖合にある島々。スペイン領)、さらに最近ではケニヤやガンビアなどのアフリカ、タイやフロリダなども人気が出てきている。憧れのハワイまで丸々一昼夜かけてアメリカ大陸を横断していくものまである。けれどもアフリカやタイは遠い(10時間の飛行時間)し、高いので、主流はやはりカナリヤ諸島(飛行時間は5時間)。各旅行社は秋に臨時便をカナリヤ諸島向けに増発している。時期によって値段にかなりの差があるが、安いときでは1週間滞在、飛行機、ホテル代込みで2500クローナ(約32500円)、クリスマスからお正月の間の最も高くなるときはその2倍だ。

なにしろ夏以降「もうスウェーデンの太陽には頭にきたわっ!」という感じで旅行希望者が増えたので、統計数字にはまだそれが現れてきていない。下の表はスウェーデン在住者の93年1月から8月までの国内および海外旅行の動向および前年

### 目 次

|                    |            |
|--------------------|------------|
| 不況の中の旅行ブーム.....    | 三瓶 恵子... 1 |
| 研究会報告.....         | 2          |
| 新刊紹介・お知らせ.....     | 3          |
| SIPニュース.....       | 5          |
| 平成5年度研究月報目次一覧..... | 6          |

同期の比較を示したものである。この表を見ると、92年秋の金融ショック前に比べて国内旅行が増えていること、国外旅行が減っていることがわかる。国内旅行の伸びは、夏休みに「スウェーデンの太陽を信じて」スウェーデン国内の家族旅行が増えたこと、国外旅行は金融ショック後夏前まではコロナの弱体化に恐れをなして、人々が海外旅行をさし控えたことなどが反映されていると思われる。

スウェーデンの国にとっては外国からの旅行者がきてお金を使ってくれてくれるのが望ましい。ちなみに一番の「お得意さん」はドイツ人である。

旅行者関係の付加価値税率が引き下げられたし、スウェーデンをもっと外国旅行者に宣伝しようというお役所 (Styreisen for Sverigebilden) もでき、あわよくば土地や会社も買ってもらおうじゃないか、と93年7月からこのお役所に投資も担当させることになった。以前からスウェーデン人はどちらかというマーケティングがへただなあと思っていたのだが、これで旅行者と海外からの直接投資が増えるのかどうか、まあちょっとお手並み拝見といこう、と考えながら楽しくグラン・カナリア行きのために飛行鞆に荷物を詰める私。

|                     | スウェーデン人の旅行<br>金額<br>(100万クローナ) | 1993年1月～8月<br>前年同期に比較しての増減<br>(100万クローナ) |
|---------------------|--------------------------------|--|
| 国内レジャー旅行<br>(宿泊を伴う) | 26071                          | +2145                                    |
| 国内レジャー旅行<br>(日帰り)   | 5982                           | +1022                                    |
| 国内出張<br>(宿泊を伴う)     | 14668                          | +257                                     |
| 国内出張<br>(日帰り)       | 5009                           | +907                                     |
| 国外レジャー旅行            | 30580                          | 2630                                     |
| 国外出張                | 13218                          | -2130                                    |

(出所: Dagens Industri 紙、1993-10-26)

## 研究会報告

### 第8回「新たな局面を迎えるスウェーデンの地域開発政策」

10月26日(火)、講師に北海道東海大学教授、川崎一彦先生を講師に迎え、新丸ビル地下会議室Bにて開催した。

今回のテーマは普段あまり馴染みのない地域開発政策という話題を取り上げて解説して頂いた。まず、スウェーデンが他の欧米諸国と比べて地理的な距離の隔たりと感覚的に意識される隔たりの違いが大きいことについて指摘されてから本題にはいった。

スウェーデンでは地域開発をめぐる南北間の格差があり、とくにスウェーデンの半分の面積を占める北部4県(全人口の1割程度)と南の地域間で著しい状況にある。

残念ながら現在まで政府による様々な政策によっても決定的な解決策は見出すことは出来なかった。そうした一連の政策展開について、次にEC加盟問題から見たスウェーデンの地域開発問題について、最後に課題の残されている地域開発政策と今までとは別の新しい成功例について詳しい説明をして頂いた。

最初にスウェーデンにおいて地域開発政策が注目されたのは、1960年代であり、労働移動庁がこの問題を担当し、当初は企業誘致が主な解決方法としてとられた。70年代にはいと、ストックホルム以南の大都市での造船業の衰退や公共部門の拡大による北部地域での雇用機会の拡大や分都による首都機能の移転などによって北から南への人口移動が停滞した。政府は保護政策として、70年代以降に本格的な方針の転換を行い、ベンチャーキャピタルの必要性を認識して、建物や機械、そして、雇用の増加に対する補助金及びソフト部分である製品開発やマーケティングにまで補助金の支給を実施してきた。また現在ではこの

他に、社会保険料の割引、労働時間のオーバータイムにたいする新しい雇用機会の拡大のための援助、北部地域から南への輸送費の補助、北部への出張費の援助（現在は廃止）、コンピューターなどによるテレコム関係の使用代金の援助などを行なっている。しかし結果的にはスウェーデン国内での南北の格差は依然として解消されてはいない。

また、ECと地域開発政策との関係では、統合によるスウェーデンの南部地域がヨーロッパとの競争や補助金の難しさなどがいろいろな資料によって懸念されていることや、スウェーデンでの地域開発政策の推進が全体のアンバランスを解消するには至らなかったものの、新しい可能性として地域開発政策の対象とならなかったグノーショーなどの地域での成功例があることが説明された。

## 第9回「高齢化率13%は地方分権の始まり」

11月15日（月）、午後1時から3時まで当研究所において、講師にこの度大阪外語大学助手になられた齊藤弥生氏を迎え、今回は地方分権と高齢化率の関係に絞って話して頂いた。まず、国家・社会も人と同様に大きく若年、壮年、老年といった3つ人口動態の図形の違いによって識別でき、各タイプの人口動態の違いによって追及される価値観や特徴があるを説明された。

次にスウェーデンは世界に先立って高齢化率18%を経験しており、日本も10年後にはこの数値に到達する。そして、人口動態図から見ても1950年代から60年代のスウェーデンと現在の日本とはほぼ状況が類似しており、さらに経済、高齢化率など多くの点で今の日本が壮年的な国から老年国へとその人口構成を変える過渡期を迎えていることを指摘され、こうした意味でスウェーデンは未来国家として捉えることが可能である。特に60年代以降のスウェーデンの経験は非常に注目すべきものである。

1960年代の急激な高齢化（13%）の経験は、女性・外国人の労働市場への進出や保育所の不足、間接税（4%）の導入、地方分権化への着手の契機となったことが説明され、将来日本において高齢化率18%となった場合、今のままでは大量の労働力の不足、女性の出生率の低下、高齢化率の上昇という悪循環が起きることが予想されることが明らかにされた。

そして女性に育児か仕事かの選択を迫られない社会が可能となったとき、こうした問題が解決され、出生率の低下や労働力の不足も解消が可能となる。

そこでスウェーデンでは、こうした状況を解決するためには、市町村の役割を大きくなし、そこでの政策の充実を図る必要を認め、地方分権化が行われた。

62年の自治体に対する「老人保健福祉計画」作りの段階で、強力な自治体の必要性が認識されたことによって自治体の整理が実施され、1972年には278地域にまで整備、2年後には課税権・自治権の憲法による保障され、1982年には社会サービス法の施行された。こうして新しい基礎自治体としてのコミューンという行政単位（財政権・行政能力）が作られ、それまでの行政単位としての町・村は廃棄された。コミューンは、地方政治のスペシャリストの団体と捉えることができ、財政的には、その収入の7割をコミューン自身が賄っており、残り3割は地方交付金である。また、福祉の充実を求めてコミューンの女性議員数が著しく増加したことも65年以降高齢化にともなって現れた現象である。

地域のニーズにあった行政のサービスの展開は、地方所得税が福祉目的税的な感覚として捉えられている感じがある。また、地方政治が身近であることによって市民の政治への関心が高いことがこうした政策を支えているといえることができる。

## 《新刊紹介》

今月は、山井和則著『スウェーデン発 住んでみた高齢社会』ミネルヴァ書房をご紹介させていただきます。

この本は以前この欄でご紹介した『体験ルポ 世界の高齢者福祉』の続編として書かれたもので、著者のルンドを中心とした2年間の滞在によってさらに深められたスウェーデンの高齢社会に対する印象と実像に迫った一冊である。

本は8章から構成され、まず、最初の1・2章では、私たち日本人や学友だった移民の人たちが感じ、考えている老いや老後のイメージと、スウェーデンの人々との大きな違いについて、実際に老後を生き生きと過ごしながら楽しんでいる著者の出会った人たちとの具体的な体験から、どれぐらい違っているかが描かれ、その充実した生活を知ることができる。

次の3章と4章ではスウェーデン人の老いへの準備段階としての中年世代の意識に言及し、さらに家族

というものがスウェーデンの社会ではどう考えられているか、福祉サービスその意識が日本を含めた国々との比較によって浮き彫りにされている。

また、5章では高齢者政策の原点ともいえる政治の実際の印象とその関係について言及され、6章では、医療中心のサービスよりも福祉中心のサービス重点が置かれている理由について、そうしたサービスを受ける高齢者と行政の双方にとって生き甲斐の点でも財政的にも良いことであるかが具体的に挙げられ、こうした状況を受けて実行されたエーデル改革について細かに解説されている。最後に「これからの高齢社会」として、日本の高齢社会への提言がされている。

スウェーデン社会と生活の断面を高齢者の側からだけでなく、政治や女性・家族といったいろいろな点からお互いが支えられていること、読みやすく非常に内容の豊かな理解の進む一冊である。スウェーデン福祉社会が描かれるとき、その毀誉褒貶は激しく、特定の視点から片寄った判断がされがちであり、厚生省によるコールドプランの発表の影響を受けて、スウェーデンへの注目度は著しい。

著者の山井氏は、一方的な思い入れから生ずる「スウェーデンの福祉はばら色」あるいは「福祉はお金がかかりすぎる」という善悪的な紋切り型の意味付けに終わるのではなく、こうした古くて伝統的なイメージから脱却し、今と未来をつなぐ私たちの生活や社会にとって、いったい何が本当の高負担になるのか。どうしたら有益で楽しい老後を若い世代とともに暮らしていくことができるのか。この一冊からそうした真摯な問いかけを求められているように思う。

## お知らせ

スウェーデン語版「バルト海のほとりにて」の出版

この度以前駐日スウェーデン大使館に勤務されていたインゴルフ・キーソー氏によって当研究所顧問の小野寺百合子氏の著書「バルト海のほとりにて」のスウェーデン語訳が出版されました。瑞題は、“Minä ar vid Östersjön”。

## 〈S I P ニュース〉

### ストックホルムの大展覧会のテーマは18世紀のフランスとスウェーデン

とくに18世紀のスウェーデンとフランスの生活に焦点を当てて、ヨーロッパ史の中心的時代をテーマとした展覧会こそが、1993年及び1994年のストックホルム及びパリにおける一大芸術イベントである。「太陽と北極星」(The Sun and the Pole Star)というタイトルがつけられた同展は、9月30日にミッテラン大統領とカール・グスタフ国王(King Carl Gustaf)によって、ストックホルム国立美術館で公式にスタートした。

17世紀及び18世紀というのは、フランスが政治的、経済的、文化的にヨーロッパを席卷していた時代で、太陽王ルイ14世がパリとベルサイユで権威をふるっていた。当時のヨーロッパ随一の芸術家達が専制君主にふさわしい作品を創造し、彼らの影響は他のヨーロッパの列強にまで及んだ。スウェーデンにおいても太陽王の熱烈な崇拝者であったカール11世(King Charles XI)が、北極星を自分のシンボルに選んだ。それ以後独裁君主権のみならず、高度の科学的、文化的業績をもシンボライズするようになった。

同展は、カール11世の後のカール12世が継ぎ、火事でストックホルムの古いキャッスル・オブ・ザ・スリークラウンズ(the Castle of the Three Crowns)が消失した1690年代を起点に展示が行われているが、その火事のおかげで、ニコデムス・テッシン(Nicodemus Tessin)設計の壮大な新宮殿が建設されることとなった。その外観はイタリアルネッサンスの影響を色濃く受けているが、内部の装飾はフランスから強い影響を被っている。

宮殿及び内部装飾の建造を、同展は綿密にフォローしているが、その一例としてはスウェーデンの画家が訓練を受けたフランスのアーティスト、タラバルの芸術アカデミー(Taraval's Academy of Drawing)を紹介していること等があげられよう。

同宮殿の華麗さは、絵画や陶器、銀といった貴重品やアードルフ・フレドリク王(King Adolf Fredrik)が1751年の戴冠式で使った金の玉座等によって十分に想像しうるが、その他、公衆の目にふれるのは今回が初めてという品々も幾つか出展されている一例えば、王宮のテーブルで用いられていた有名

なクロイツのシルバーセットやセーブルの食器セット等。また、王室の宝物として継承されてきたフランスのアーチスト、ジャン・フランソワ・クジネ (Jean - Francois Cousinet) による銀の洗礼盤、また、フランスとの協力をベースに国内及び対外政策を決定したグスタフ3世 (King Gustaf III) の時代の品々も数多く出展される。彼の遺産は、いわゆるグスタヴィアン時代 (1772~1792) である。因みに、同王は1792年3月にストックホルム王立歌劇場で開かれた仮面大舞踏会で暗殺された。同展は、来年度は3月15日~6月13日にかけて、パリのグランド・パレスにおいて催される。(SIP 294/93)

### 国連総会での外相演説：国連の役割と重要性を強調

9月28日の国連総会において、スウェーデンの外相マルガレータ・アブ・ウグラス (Margaretha af Ugglas) の行った演説骨子以下の通り。

「冷戦の終結によって、国連憲章及び国連機構の潜在力を十二分に利用する機会が新たにもたらされた。ただし、同機構が世界の国々の強力な媒介機関として機能しようとするならば、徹底的な分析と強力な処方が必要であろう。元の国連事務総長ダーグ・ハンマルショルド (Dag Hammarskjold) の言を引用すれば、国連は活気ある、発展してゆく、実験的な機関であり、そうあるべきである。もしも、同機関がそうであることを止めるのならば、それは新たな道を求めて、大変革がなされる時か、または一掃されてしかるべき時であろう。

国連が主として責任を有している分野は世界の平和と安全保障の保護であるが、同分野における改革は大いになさるべきであり、過去2年間だけでも、国連の様々な平和維持活動の職員数が10,000人から80,000人に増員された。こういった事情を踏まえた上で、私は以下のような一連の具体策を提案するものである。すなわち、プランニング及び活動スタッフのためのより良い設備；命令と管理に関する明確な定義づけ；軍への貢献者、安保理事会、事務総長間の密接な協議等々。

私はまた、安保理事会及び軍への貢献者間のコンタクトを密にするべく、主要な各活動の情報交換及び調整のためのフォーラムを提案するものである。さらに、国連加盟諸国に対して、私は、軍隊及び他の人員、国連平和維持活動に即利用するための非常用設備の提供を求めるものである。なお、平和維持活動と人道主義的援助間の調整の見直しが必要であろう。適正な訓練の必要を満たすためには、国連の特別訓練兵学校を全てのスタッフに向け設置すべきで、それについては、この分野での長年の経験を有する加盟諸国が責任を持って、新加入国に情報を提供してゆくべきであろう。因みに、この分野に関しては、我が国は国連との協議の上、平和維持軍の能力向上に貢献する用意があることを強調しておきたい。

最後に、スウェーデンは目下、国連の財政危機に多大な関心を寄せているが、予定の寄附金の90%の支払が遅れるか、もしくは全く支払われていないのが気がかりである。遅れずに全額支払うという財政上の義務履行の上での原則を全うするためには、奨励金制度や刑罰を課することを考えてはいかがであろうか。」

今回の国連演説は、以前の外相演説とは違い、いつものような世界の紛争及び危機に関する情勢分析を含まず、もっぱら冷戦終結後の国連の新たな役割に関する内容が中心であった。(SIP 304/93)

### 核廃棄物研究所のためのテストトンネル

此の程、スウェーデンの建設会社スカンスカ (Skanska) が、スウェーデン東海岸のアスポ島にある地下の核廃棄物研究所用に深さ420mのテストトンネルを掘削するために、アトラスコプコグループ (the Atlas Copco group) のメンバーであるロビンス (Robbins) と、同社の径5mのトンネル掘削装置 (TBM) を購入する契約を結んだ。

同プロジェクトにはスウェーデン核燃料及び核廃棄物管理会社 (Avensk Kärnbränslehantering) が全面的な責任を有しており、6ヵ国-カナダ、フィンランド、フランス、日本、英国、米国-7組織が参加している。岩の研究所はスウェーデンの使用済み核燃料の地下貯蔵のための開発及びテスト技術のために建造されたもので、研究開発のみのための施設であり、将来、スウェーデンの核廃棄物貯蔵所となる可能性はない。

同プロジェクトでは3kmに渡って勾配をつけ、固い岩を地下400mまで発破をかけ掘削してゆく。なお、掘削中は、岩床の調査が実施される見込み。TBMは先カンブリア時代の花崗岩を掘削することになるが、出荷は1994年4月となる。(SIP 297/93)

# 平成5年度研究月報目次一覧

- No. 1 新年の御挨拶……………西村 光夫…1  
 謹賀新年……………松前 達郎…2  
 スウェーデンのケアワーカー日本の福祉  
 を見る……………宇野 裕…2  
 一連の経済危機対策…小野寺 百合子…3  
 研究会報告……………4  
 SIPニュース……………5  
 平成4年研究所活動メモ……………6
- No. 2 ルンドからの近況報告  
 ……………飯野 靖四…1  
 北欧とEFTA・EC・EEA  
 ……………武田 龍夫…2  
 新しい社会福祉システムの模索  
 ……………城戸 喜子…3  
 研究会報告・新刊紹介……………4  
 SIPニュース……………5  
 Current Sweden 目次(14)……………6
- No. 3 わが国の高齢化……………潮見 憲三郎…1  
 環境問題の重要性……………小沢 徳太郎…2  
 もしもお金があったなら  
 ……………三瓶 恵子…4  
 研究会報告・新刊紹介……………5  
 SIPニュース……………6
- No. 4 学ぶべく、真似るあたわず  
 ……………庭田 範秋…1  
 1993年度予算案(1)中村 友子…2  
 エーデル改革と90年代スウェーデンの  
 高齢者ケア……………山井 和則…4  
 SIPニュース……………6
- No. 5 系図と高齢者の住まい  
 ……………山本 明…1  
 1993年度予算案(2)……………中村 友子…2  
 90年代の高齢者政策に『老人ホーム』が  
 再登場……………斎藤 弥生…4  
 新刊紹介・SIPニュース……………6
- No. 6 わが国におけるオンブズマン制度導入を  
 めぐる現状……………川野 秀之…1  
 スウェーデンの新大学教育改革案  
 ……………フォン・オイラー 三根子…2  
 スンドストレーム博士の来日  
 ……………小野寺 百合子…4  
 新刊紹介・SIPニュース……………6
- No.7・8 スタートするスウェーデンの大学評価制度  
 ……………川崎 一彦…1  
 スウェーデンの障害者雇用  
 ……………広瀬 智子…2  
 研究会・講演会報告……………4  
 新刊紹介・SIPニュース……………5
- No. 9 スウェーデン議会の開催  
 ……………岡沢 憲美…1  
 地方分権化と補助金改革  
 ……………藤岡 純一…2  
 ハマーショルドとJASプロジェクト  
 ……………高橋 一夫…4  
 SIPニュース……………6
- No.10・11 ふたつの福祉国家モデル  
 ……………藤井 浩司…1  
 女性をもっとも生きやすい国  
 ……………中山 庸子…2  
 オンブズマン年次報告(英文要約)  
 ……………坂田 仁…4  
 SIPニュース……………6
- No.12 不況の中の旅行ブーム  
 ……………三瓶 恵子…1  
 研究会報告……………2  
 新刊紹介・お知らせ……………3  
 SIPニュース……………5  
 平成5年度研究月報目次一覧……………6